

恐れず隠さず「女になる」

公開中の映画——性別適合手術など赤裸々に

神戸の大学生「身も心も好きな私になれた」

2月に性別適合手術を受け、戸籍も女性になったトランスジェンダーの大学生が、その決意から手術室までのすべてを、公開中のドキュメンタリー映画「女になる」でさらけ出した。男性だった過去を隠さず、堂々と生きる——。そんな思いを胸に、新たな一歩を踏みだそうとしている。



性的少数者のイベントで結婚衣装のモデルを務め、恋人の東根歩夢さん(左)とほほえむ中川未悠さん=10月、大阪市、中川さん提供

トランスジェンダー

性的少数者のうち、心と体の性が一致しない人をさす。性同一性障害と診断されている人も含む。特例法により、「20歳

以上」「未成年の子がいない」「生殖機能を欠く」「変更したい性別の性別に近い外観を備えている」などの条件を満たせば、家裁で性別の変更が認められている。

初恋は男の子。筆箱も服も女の子用が好きだった。「なのに、体を見れば私は男。ずっと打ちのめされてきた」。神戸市の大学生、中川未悠さん(22)は悩み抜いた少年期を振り返る。

心は女性でもヒゲは生え、興奮すれば男性として体が反応する。背が伸び筋肉が付き、中性的な少年から着実に「男」になっていく体に恐怖すら感じた。

「女になるう」。大学生になり、お年玉やお小遣いをためてきた通帳を手に、心を決めた。家族には「親子の縁を切られる覚悟」でカミングアウトし、理解を得ていた。手術前の処置に向かう前夜、祖母(69)は中

川さんの手を握り、一緒に眠ってくれた。

エキストラ募集を通じ、映画監督の田中幸夫さん(65)と出会ったのは一昨年秋。代表作は「凍蝶圖鑑」(2014年)で性的少数者らと真摯に向き合うドキュメンタリーだった。

中川さんは、一目で自分を男性と見抜いた田中さんへの信頼を深めた。「私、手術するので撮ってくれへんかな」

プライベートを公開する影響は大きい。出演後に後悔する若者も見てきた田中さんは懸念したが、中川さんの決意は固かった。「男に生まれた過去を隠せば、びくびくしながら生きるしかない。私はそんな人生は嫌。性に悩む人のイメージを変えるためにも私が表に出たろ、と思います」。その言葉が田中さんの心に響いた。「覚悟を持つ人には

品性がある。その意味で彼女は美しい人。上品の人」撮影開始は昨年8月。学生生活、性的少数者の友との「ガールズトーク」、手術台の上でこわばる顔……。赤裸々な姿をつづった74分を締めくくるラストシーンでは、身も心も女性になった中川さんの、輝く笑顔だった。

映画を撮り終えたころ、中川さんに恋人ができた。神戸市の運送業、東根歩夢さん(25)。女性の体で生まれたトランスジェンダーで、性別適合手術を受けた男性だ。夢見た幸せも得た中川さんは女性として社会に出ることに「わくわく」しつつ、就職準備に励む。

中川さんは言う。「手術ですべてが解決したわけじゃない。理解してくれる人ばかりではないのが現実。それでも今、身も心もすべて自分を好きな私に、ようやく、なれたんです」

映画「女になる」は17日まで、東京・新宿の「K's cinema」で上映中。(西本ゆか)